

【発表者】

福内 千絵（関西学院大学先端社会研究所 専任研究員）

【コメンテーター】

置田 清和（京都大学白眉センター 特定助教）

豊山 亜希（近畿大学国際学部 特任講師）

【日時】

2016 年 10 月 28 日（金）18:30 開演（18:00 開場）

【会場】

京都大学・人文科学研究所 4 階大会議室

19 世紀英領インドの語りにおいて、インド美術に対する西洋の反応は、「全インドを通じて立派な絵画一つ、見事な彫刻一つさえ見ることができず、神像ですら見どころといったらずっとするほど恐ろしいというだけだ」という言に集約される否定的なものであった。また、聖典プラーナの「恐ろしい」姿をした神像への礼拝儀礼に対して多神教や偶像崇拜的傾向を認め、西洋の近代科学の光で遍く照らしだすべき「プラーナの暗闇世界」が指定されることとなった。

19 世紀後半に活発化するヒンドゥー教の宗教改革運動、いわゆるネオ・ヒンドゥーイズムは、こうした西洋から否定されたプラーナのヒンドゥー教にかわって、古代の聖典ヴェーダを典拠とするヒンドゥー教こそが真正なヒンドゥー教だとして呈示するものであった。

一方、同時期の美術の領域においては、西洋からのまなざしをめぐって「インド美術」のアイデンティティや真正性が議論され、神像を形象化してきたヒンドゥー美術の伝統が焦点化された。こうした動きはネオ・ヒンドゥーイズムと平行な関係にあると考える。

本報告では、インド近代美術史で展開される神イメージの在り様を、「ヴェーダ」あるいは「プラーナ」で共有された神観念との関係から考察し、近代ヒンドゥーイズムの実相に迫りたい。

▽会場へのアクセス（京都大学吉田キャンパス本部構内）



【備考】

- * 京都人類学研究会は京都を中心とする関西の人類学および関連分野に関心をもつ研究者・大学院生がその研究成果を報告する場です。
- * 事前の参加予約は必要ありません。どなたでも自由に参加いただけます。
- * 当日は資料代として 200 円いただきます。
- * 講演会後に懇親会を予定しております。

【お問い合わせ】

kyojinken2016@gmail.com（京都人類学研究会事務局）

京都人類学研究会 2016 年度代表：平野（野元）美佐 代表補佐：田中雅一

インド近代美術史の描くヒンドゥーイズム
「ヴェーダ」と「プラーナ」の神観念・イメージに着目して